



協力新美南吉記念館  
**新美南吉**  
パネル展  
作者経歴

童話作家 新美南吉の世界  
よのつねの喜びあなしみがなれたに、ひとしれぬ  
美しいものもあるを知っていきあなしむ  
そのあなしむを生進うたいづけた。

生涯Ⅰ 生い立ちから大正時代まで  
新美南吉は、1903年（明治36年）11月11日、岡山県新美町（現・新美）に生まれる。幼少時代は岡山県新美町で過ごす。父は新美町長官舎の警備員、母は新美町立小の教員。南吉は長男で、弟は新美町立小の校長。南吉は幼少時代から文筆に秀でていた。小学校時代から小説や詩を書き、新聞に掲載された。大正時代に入ると、児童文壇で活躍するようになる。代表作『おひさまのこゝろ』は、大正12年（1923年）に発表された。この作品は、児童文壇で大ヒットし、南吉の知名度を上げた。大正15年（1926年）に『おひさまのこゝろ』が児童文壇大賞を受賞した。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。大正16年（1927年）に『おひさまのこゝろ』が児童文壇大賞を受賞した。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。大正16年（1927年）に『おひさまのこゝろ』が児童文壇大賞を受賞した。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。

生涯Ⅱ 東京時代と帰郷後の自筆  
南吉は、大正16年（1927年）に東京府立第一中学校（現・東京都立第一高等学校）に入学する。東京時代には、児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。大正17年（1928年）に『おひさまのこゝろ』が児童文壇大賞を受賞した。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。大正16年（1927年）に『おひさまのこゝろ』が児童文壇大賞を受賞した。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。

生涯Ⅲ 安城高女時代とひきこもり  
南吉は、大正18年（1929年）に安城高等女学校（現・安城女子大学）に入学する。安城高女時代には、児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。大正19年（1930年）に『おひさまのこゝろ』が児童文壇大賞を受賞した。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。大正16年（1927年）に『おひさまのこゝろ』が児童文壇大賞を受賞した。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。

新美南吉の生涯  
新美南吉は、岡山県新美町に生まれる。幼少時代は岡山県新美町で過ごす。父は新美町長官舎の警備員、母は新美町立小の教員。南吉は長男で、弟は新美町立小の校長。南吉は幼少時代から文筆に秀でていた。小学校時代から小説や詩を書き、新聞に掲載された。大正時代に入ると、児童文壇で活躍するようになる。代表作『おひさまのこゝろ』は、大正12年（1923年）に発表された。この作品は、児童文壇で大ヒットし、南吉の知名度を上げた。大正15年（1926年）に『おひさまのこゝろ』が児童文壇大賞を受賞した。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。大正16年（1927年）に『おひさまのこゝろ』が児童文壇大賞を受賞した。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。

新美南吉の作品  
新美南吉の作品は、児童文壇で大ヒットし、多くの児童文学作品を発表した。代表作『おひさまのこゝろ』は、大正12年（1923年）に発表された。この作品は、児童文壇で大ヒットし、南吉の知名度を上げた。大正15年（1926年）に『おひさまのこゝろ』が児童文壇大賞を受賞した。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。大正16年（1927年）に『おひさまのこゝろ』が児童文壇大賞を受賞した。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。

南吉のふるさと新美町・岩瀬  
南吉のふるさと新美町・岩瀬は、岡山県新美町にあり、新美町立小の校舎が、南吉の生誕地である。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。大正16年（1927年）に『おひさまのこゝろ』が児童文壇大賞を受賞した。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。

新美南吉の半生  
新美南吉の半生は、岡山県新美町にあり、新美町立小の校舎が、南吉の生誕地である。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。大正16年（1927年）に『おひさまのこゝろ』が児童文壇大賞を受賞した。南吉は、大正時代を通じて児童文壇で活躍し、多くの児童文学作品を発表した。